

国際関係論における コンストラクティビズムの再構築に向けて —アレクサンダー・ウェントの批判的検討を中心として—

前田 幸男 *

はじめに

冷戦構造の崩壊、同時多発テロ、グローバル経済の深化、情報ネットワーク技術の深化、地球温暖化などの世界構造の認識をめぐる問題の複雑性に対処すべく、各研究者は国際関係論（以下、IR）においてどのような理論やアプローチを採用するのかということについて格闘している。こうした世界秩序の複雑化に対応すべく、米国では実証主義を基盤にした合理的アプローチが圧倒的なプレゼンスを効かせている⁽¹⁾一方で、コンストラクティビズム (constructivism)⁽²⁾はその枠組みの緩やかさゆえに、内部に様々な論者を抱え、非常に錯綜・混沌とした状況が続いているように思われる。その中であって、またしても IR のハードコア（堅い核）はアクターとしての国家であるという議論が展開されてきているといわざるをえない。⁽³⁾つまり、端的に言えば90年代初頭辺りからのアレクサンダー・ウェント (Alexander Wendt) (以下、ウェント) 流のコンストラクティビズムの展開は IR のハードコアは国家であることの念押しでしかないといっても過言ではないのだ。⁽⁴⁾このウェントの立場を問題の俎上に載せることが本稿前半の目的であるが、なぜそうする必要があるのであるのかについて若干触れておきたい。コンストラクティビズムとは世界を言語によって理解する一つのアプローチといえるが、同時にこうした言葉の理解を基に我々一人一人は行動を作り上げていく。コンストラクティビズムは人間による社会事象の理解とそれに対する実践を司る意味の解釈図式の構築過程そのものを研究対象にしている。理解も変われば、実践も変わる。いかようにも転ぶ。別の言い方をすれば、ウェント流の手法に則って IR を理解すれば、その延長に登場してくる実践のあり方も自ずと構築されていくことになる。従って、こうしたアプローチに対して異議があるならばオルタナティブを提出せざるをえない。つまり、人々の理解とそれに連なる実践を掛け金として、コンストラク

* 社会科学研究所助手

ティビズムの理論展開そのものがバトルフィールド（闘技場）化しているのである。⁽⁵⁾ しかも、コンストラクティビズムは、その学際性ゆえリサーチプログラムの統一的発展が難しいといわれているにもかかわらず、制度や規範、ルール、アイデア、文化などのどれかひとつでも研究対象にするものにとっては示唆が得られる可能性を期待して、容易にアクセスをすることができる交差点のような場所に位置していると理解できる。どの方向にでもこの概念は引き込むことが可能なのだ。であればなおのこと、その議論の内実が何であるかを注意深く精査することが重要である。さもなければ、コンストラクティビズムを手法として採用しているにもかかわらず、最終的には現実主義の系譜に位置していることなど往々にしてありうるからだ。さらにいうならば、今日これだけコンストラクティビズムの議論が継続的になされている中で、⁽⁶⁾ あらゆる研究者は、このアプローチを採用するのかもしれないのか、そして仮に採用するとすればどのような系譜の下で、どのような意味において採用するのかを明確に表明する義務があるのではないだろうか。⁽⁷⁾ 様々な事象を分析するのにどのような虫がね（アプローチ）を使うのか次第で、見える世界の現実がまったく変わってくるからだ。以上のことを踏まえたと、本稿では、コンストラクティビズムの手法を採用するという前提の下、その議論を主導してきたといわれているウェントのコンストラクティビズム論⁽⁸⁾を批判的に精査する。その上で、コンストラクティビズムの立場を深めるためには避けて通れないと考えられる『権力』概念をめぐる考え方に焦点をあて、ウェントの権力観を問題の俎上に載せ、彼のイメージする権力概念とはまったく異なった『権力』観を中心とする新たなコンストラクティビズムの再構築の可能性について述べる。

I. アレクサンダー・ウェントのコンストラクティビズムとその問題点

ウェントの立論には様々なコメントや批判が登場しているが、まずそれがどのポイントに対してなのかということを吟味するために、ウェントの理論の核と考えられるいくつかの点を確認していく。

1. 国家実在主体論

ウェントはまず、自らが射程に入れる議論の範囲を特定するために、暴力の統制は社会生活の中で最も基本的な問題の一つであるとして「もし人々が殺されることを決められたり、お互いを征服するということができれば、彼らは貿易や人権の分野で協力

をしないだろう」⁽⁹⁾として、他の経済や家族などの社会関係を暴力(あるいは安全保障)の問題に還元できるとは考えないまでも、ウェーバー流の組織化された暴力の独占の問題が決定的に重要であるという立場(=存在論)を保持する。そしてその帰結として、世界政治の支配的な構成単位(primary unit)は国家ということになる。⁽¹⁰⁾結果的にはローポリティックス(low politics)に対するハイポリティックス(high politics)の優位を貫くというスタンスを明確にしたとあってよい。⁽¹¹⁾しかも彼は、国家間関係としての国際政治に研究領域を限定する根拠として、国家を一つの有用なフィクションあるいはメタファーであると位置づけるのではなく、あくまで主体として活動する実在化した存在として位置づけるのである。ウェントの狙いはこうだ。つまり、国家を**実在するアクター**として指定する国家中心主義的IR理論が、国際システムの性質を弱肉強食の世界(the law of the jungle)から法の支配(the rule of law)的世界に移行する可能性についての洞察を創り出せると考えているのだ。⁽¹²⁾彼にとってはこうした協調的な国際システムという大きな物語を描くためにも、国家を実在の主体とすることは必須なのだろう。彼がこの「国家実在主体論」を正当化するロジックを念入りに読み直すことは重要である。なぜなら、そのロジックの中にこそ彼の国際システム固有の研究領域と国内政治で決まる研究領域という二分法的理解が反映しているからである。

私の主張は、「システム」理論家たちが、国家間システムは諸国家を前提としているためにそうする(国家の内的構成を問題の俎上に載せる)ことができないというものだ。だから、もし我々がこうしたシステムの構造を分析したいならば、それらの要素を端から端まで(all the way down)「脱一中心化する」ことはできないのだ。従って、リチャード・アシュレーや他の批判理論家たちが、何よりも国家を問題の俎上に載せることに失敗した個人主義者たち(ここでは国家をアクターと置いて分析したネオリアリストたち)を正しくも批判したのとちょうど同じように、端から端までそうすることは他方のシステムにまつわる問題に対して同じことをすることになる。我々はすぐさますべてのものを研究することはできないし、所与の主体がどのように扱われるかについての批判と、テーマを取り替えよという要求とを区別することは重要である。⁽¹³⁾〔()内は著者による追加〕つまり、国際社会での交渉主体としての国家を主体として中心に置き続けることでしかウェントの研究は発展しないのであり、それはウェントの議論を補完すべくその後に出ているウェント自身による諸論稿を見れば明白である。つまり、国家は国際関係を語る際に、何があろうとウェントにとっては決して抜け落ちることのないハードコ

アになったのである。この点は、それ以降のウェントの議論展開にとっても決定的であったように思われる。⁽¹⁴⁾とはいえ、ウェントはいったん国家の多義性については考察している。彼は本質的な国家(the essential state)は5つの特性をもっていると論ずる。それが①制度的・法的秩序、②組織化された暴力の正統な独占の使用を要求する組織の存在、③主権を持った組織、④社会(a society)、⑤領域(territory)、の5つである。⁽¹⁵⁾そして国家を概念化する際に三つの流れが存在してきたことを指摘する。すなわち、国家を国内社会とは異なり独自に活動するアクターとして捉えるウェーバー派、いわゆる国家は政府以上のものではなく、社会の反映とみなす多元主義派、そして国家と社会が相互に構成しあっている構造と捉えるマルクス派の三つである。この3つの流れで先の5つの本質国家なるものの特性を敢えて簡潔に切り分けるとすれば、①がマルクス的な構造としての国家、②と③がウェーバー的なアクターとしての国家、④が社会としての多元的な国家、そして⑤が3つに共通のものとしている。ところが、IRとは国際社会を議論する学問という前提から、彼はウェーバー的なアクターとしての国家がまず中核に来て、それを他の要素で補完するというスタンスを取る。しかも驚くべきことに5つめの領域について徹底的に問題の俎上に載せることはテーマを変えることと同じであるとしてまたしても彼は軽く受け流す。⁽¹⁶⁾ウェントの著作の中に何度か出てくる「テーマを変えることになってしまう」というフレーズはある種の思考停止を強要されているようにも思える。そして様々な可能性を排除した思考停止状態のままウェントは、国家間によるアナキーの文化とその変容を語ることに国家には人格性があるという「テーマ」を展開することになる。それを特徴付ける象徴的な箇所を引用しておきたい。

私は国家(states)が存在論的に国家間システムに先立っていることを示したい。

国家は人間の肉体(the human body)が前社会的なものであると同様の仕方での国家との関係で前社会的なものである。両方とも一方は社会的、他方は生物学的な内的構造を自己組織化することで構成されている。⁽¹⁷⁾ [強調は著者による]

まるで原初状態にいる主体を想定するやり口はかつての正義論を想起させるようにもおもわれるが、今日、まさに身体とは歴史を刻印され、時に分裂した存在として問題の俎上に上ってきているのと同様、国家も決して単一ではなく、時に分裂・内的矛盾に陥っているという事実には彼はあえて正面から取り組まない。むしろ、それとは逆行する形で、彼は国家を生物学的肉体と類似のものとしてイメージできると考えているのだ。しかしながら、実際に国家は生物としての肉体と同じものでは決してないし、

国家とのアナロジーとしても肉体を引き合いに出すことさえもそもそも妥当かどうか依然として問題が残る。

2. ウェントの社会理論

上記の国家と肉体のアナロジーをウェントは展開するのだが、アナロジー自体が適切なかどうかという問題以外にも、彼が拠り所とする社会理論との関係でも根本的な矛盾が生じており、深刻な問題を抱えている。まず、彼は自らの立場をミクロ社会理論とマクロ社会理論の組み合わせにより作り上げているとしており、前者の核になる理論がアンソニー・ギデنز (Anthony Giddens) の構造化論とロイ・バスカー (Roy Bhasker) の科学的实在論 (scientific realism) であり、後者の議論の核は G・H・ミード (George Herbert Mead) のシンボリック相互行為論であるとする。⁽¹⁸⁾ところが、ウェントの立論は特にギデنز構造化論との深刻な断絶を起こしているといわざるを得ない。ギデنز構造化論の狙いは、社会システムに対して目的や動機や欲求といった類のものを仮定する傾向が強い機能主義的アプローチの徹底的批判だったはずである。⁽¹⁹⁾ウェント自身、機能主義に陥らないようにしなければならないと述べているにもかかわらず、実のところは、システムに目的論を読み込んでいく方向に進んでいる。簡潔に言えば、彼は国家間の承認をめぐる闘争が①国際システム (The System of States)、②国際社会 (The Society of States)、③世界社会 (World Society)、④集団的安全保障 (Collective Security)、⑤世界国家 (The World State) へと目的論的に進化しうることを論じているのだが、それは実質的に機能主義となんらかわりのない。⁽²⁰⁾しかも、ギデنزが「主体」と「構造」の関係性を問題にする際に、人間と社会・国家・世界との相互規定的関係性を説明することが主眼だったはずである。ギデنزの社会理論は確かに社会一般を読み解くための一種のプロトタイプであり、様々なシーンに適用可能ではある。ところが、ウェントの用い方では、構造とは国際システム構造であり、主体とは諸国家となっており、主体は国家の中にいるとされる人間にまでは決して降りていかない。⁽²¹⁾少なくともギデنزに従うならば、構造は日常生活の**実践**から来るし、身体としての人間から来るのではなかったのか。しかも、かつてウェントはスリフトを引用して「社会理論は歴史的、地理的に固有のものでなければならないという意味だけでなく、完全に最初から (*right from the start*) 社会構造の時間—空間構成に関するものでなければならない」ことに注目していた⁽²²⁾のだが、ウェントの時間—空間構成は国家と国際システムの二分法的理解の内に完全に固定され、スケールが多層

的であるといった議論には進まなかった。⁽²³⁾むしろ、国家空間を特権化し、領域の存在をできるだけ問い直さないようにする方向で、社会理論を利用しながら彼のための理論構築を行ったのだ。

結局、ドティのいうように、ウェントの語る「国家とは欲望を持つ本質的な存在であるというよりも、IR という研究分野を確保しようという一部の研究者たちの欲望そのもの」⁽²⁴⁾を反映する存在にすぎないのだ。

3. システムと社会

先の引用からもわかるようにウェントが「システム」について語る時、特有の意味をシステムにもたせている。その一つが、先にも指摘したような生物学的なシステム論のイメージをアナロジーとして使えることを公言していること。もう一つが、システムとは国際システムあるいは国家間システムに専ら限定されていることである。この後者のスタンスはケネス・ウォルツ (Kenneth N. Waltz) の第3イメージ (the third image) としての国際面についての国際政治理論は独自に存在するという点を、ウェントは明確に継承しているということと深く関わってくる。⁽²⁵⁾ウォルツの問題設定は正しかったが、その手法がマテリアルなものに限定された点が問題であるとする。しかしながら、システムという時、様々なシステムを包みこんでいる社会システムの中に国際システムが存在するはずのものが、ウェントにとっては国際システムでない領域はすべて国内システムに入ってくる。それは例えば、以下の箇所でも顕著である。

国家が相互作用する際に、それらは各自の社会と概念的に鎖でつながれている。そしてこのことがマルクス主義や多元主義の分析からの洞察と我々の（アクターとしての）国家の概念化を補完することを要求する。言い換えれば、この観点からは、対象主体としての国家は内的に政治的権威の構造によって統治している社会と結びついている組織的なアクターとして概念化されるべきである。⁽²⁶⁾ [() は著者による加筆]

つまり、右の引用が示しているように、ウェントはウェーバーに従ってアクターとしての国家を分析対象の本質として措定した上で、その国家の行動を説明するために国内状況に注意を払っているとされる多元主義派やマルクス派で補完しようと考えているのである。もはや明らかだろう。上記で引用したようなウェントの枠組みに従えば、社会 (a society) とは国内社会と同義なのだ。社会の上につく形容詞は依然として国家 (the national) であり、それが当然視さえされていることから、もはや国家社

会 (a national society) とわざわざ明記すらされていない。⁽²⁷⁾ しかもウェントに従えば国家のアイデンティティは原理上、対外的な相互作用と国内社会での諸勢力のアレンジメントの組み合わせで決まっていくということになる。確かに、例えば日本の総理大臣の靖国神社参拝をめぐる中国の外交行動・国内でのデモを受けて、こちらのアイデンティティが形成・再形成されることを考えるとウェントの指摘する点は決して間違っているとはいきれない。しかし、国際関係の舞台は各国間で繰り広げられているながらも、社会と名のつくカテゴリーは常に多層的なのだ。EU しかり、国際連合しかり、地域市場しかり、情報や人間のフローしかりである。例えばグローバル都市といわれているローカルな場所は、ウェントにあっては国内社会と同義として捉えられてしまうのだろうか？それともアナーキーの文化をもつ国際社会における現象なのだろうか？あるいはそれは国際関係の事象ではないので捨象するのだろうか？常に「国家」と「国家間システム」の組み合わせによって、様々な現象を括り直さなければいけない理由はいったい何であろうか。すでに社会学の領域から発せられた声の中には、国家社会の概念が「社会」という用語でこれまであまりにも流布しすぎてきたことを批判する流れはすでに確立した。⁽²⁸⁾ 今度は IR そのものが、国際システムと国内システムという二項対立的枠組みから脱却する時が来ている。⁽²⁹⁾ そして先ほどの引用でも少し触れたが、ウェントは国際システムと国内システムの二分法的スタンスの下で、そのリンクを論ずる際に「国家—社会複合体」という枠組みを用意する。

国家と社会が、一つの国家—社会複合体 (in a state-society complex) の中で内的に関連づけられていると言うことは、国家が社会との関係で構成されているだけでなく、社会は国家によっても構成されているということの意味している。⁽³⁰⁾ ウェントは確かにロバート・コックスの使った「国家—社会複合体」というフレームワークを意識はしているが、それはあくまで国家—(国内) 社会複合体としてである。しかしながら、コックスは「国家—社会複合体」とはいつでも、実際は**諸国家—諸社会複合体 (states-societies complex) 全体で進行する事象**を射程として議論を進めてきているのだ。つまり、ハイパーリベラリズム (あるいはネオリベラリズム) という言葉を使って、世界の様々なところで市場化が進んでいることを指摘する市場の国際化 (internationalization of markets) とそれを調整・一体化させていくかのような国家の国際化 (internationalization of states) の動きが同時進行するという議論である。⁽³¹⁾ 例えば、OECD 各国で共通に起きている、経済事象 (正社員比率の低下、賃金上昇の頭打ち、製造業の空洞など) に対して、あるいはその一因として、共通してなされている新自

由主義的政策（会計監査の基準の統一化、規制緩和、ケインズ主義的財政政策の終焉、デフレ指向政策、社会保障分野のプライバタイゼーションなど）の時代的流れをどのように説明するのかという観点である。一つの国家—社会複合体内部で事象が完結するというよりも、諸国家—諸社会複合体という枠組みに、事象が拡散していることを鑑みれば、少なくともウェントのいう「国家—社会複合体」は後者に補完されるか、あるいは後者の中の一部に組み込まれるに過ぎないのである。⁽³²⁾

4. 物質的なものと観念的なものの二分法

ウェントはウォルツなどのネオリアリストらは物質的なもの (the material) である国力の計算にのみこだわりすぎており、観念的な領域であるアナーキーの文化といったものにはこれまで注目してこなかったと指摘している。⁽³³⁾そして、この文化が成熟していくにつれてホブズ的な文化がロック的文化に、さらにはカント的文化へと進化しようと示唆する。確かにこの議論によれば、国家の利益は単なるエゴイスティックな主体からより協調的な主体へ観念的に再構築される余地が出てくるかもしれない。しかし、このウェントの定式化では計算可能な物質的な力の大きさがイコール権力の大きさであると理解する伝統的な国際政治のパワーポリティクス観を完全に脱したとはいえない。むしろ、これまで頻繁に国際関係の中心問題であり続けてきた「権力 (power)」概念に正面から取り組むというよりも、意図的にそれへの回答を回避して、「観念」が権力や (国家) 利益を大部分構成しているという議論に専念していく。ウェントの物質・観念の区分はこうだ。

権力と利益は以前と同様、重要で決定的である。主張点とは、むしろそれらを取りまとめる観念のおかげで、権力と利益は効果を持つという点にある。権力と利益による説明は観念を前提としている。その程度で、観念による説明は決して競合するものではない。⁽³⁴⁾

またこうも述べる。

観念論者の社会理論は現実世界の存在を否定するものではない。ポイントは、現実世界は物質的諸力それ自体よりもより多くの要素で構成されている。⁽³⁵⁾

結果何が起こるのか。それは物質的要素と観念的要素各々による二元論の説明だけが残り、後者に重きを置くとはいえ、あらゆる事象はその二つの足し算で議論され尽くせることになる。⁽³⁶⁾しかしながら、人間の身体を例に考えてみてほしい。主体としての人間は脳と肉体に区分できるのだろうか？この問題を別の角度から考えてみよう。

ウェントは生産関係、資本主義やマルクスのいう土台構造を物質的なものではなく、観念的なものあるいは文化的形態として考えている。⁽³⁷⁾ 私は、それに唯物論の立場からドグマ的にウェントを批判するつもりはない。むしろ、ウェントが立脚しているとされる構造化論から彼の立論に疑問を呈しただけである。資本主義や生産構造を瞬間瞬間、維持しているのは、観念ではなく、主体としての**人間の実践**ではなかったのか、とウェントに問い直したいだけである。⁽³⁸⁾ 社会理論と自称する以上、ウェントも実践・活動を行う人間を扱っているはずだが、人間は結局、物質と観念のどちらに区分されるのだろうか？結局、彼の立論でいくと不可分の存在であるはずの人間は両者にバラバラにされることになる。あるいは彼はこういうかもしれない。「人々（人間）を扱うことはテーマを変えることと同じになってしまう」と。

上記を象徴するような箇所について言及しておきたい。ウェントが冷戦を終了させるゴルバチョフの新思考の政策について議論している箇所だ。⁽³⁹⁾ まず見えない力のモデル (blind forces model) に結びつける人々は、ソ連の指導者が経済的・軍事的権力の相対的位置の低下のために政策を変更しなければいけなかったという主張をする。それに対して、ウェントは力の低下が重要な弾みであったことは認めるとはいえ、構造的な圧力だけでソ連の対応（抑圧を強めるよりも冷戦を終わらせる）やそのタイミングを説明することはできないとしている。むしろソ連の行動の変化は、自己批判的に既存の欲求と信念を考え直した結果として、彼らの利益を再定義したからだとする。ウェントはソ連の力の低下が、冷戦の終焉を主に説明するという、あまりにもナイーブな考えを退けているとはいえ、利益を再定義し政策変更をした理由は、依然として力の低下にあったことを認める。しかしながら、例えば、新思考外交が開始されソ連の政策構造が少しずつ変化する中で、ハンガリーから西側へ人間が動き、それが東ドイツの人々の移動に拍車を掛け、それがメディアで報道され、これがさらなる駆動力を与え、最終的にはベルリンの壁が崩壊したという一連の連鎖する出来事の流れを世界の多くの人々は再帰的に経験した。ウェントは冷戦の崩壊の一因ともなっている、物質にも観念にも還元できない人間の移動そのものと国家の政策担当者との徹底的な再帰的相互作用を掘り下げることはしないのだ。それが実際は人間の集合的行動（実践）としての権力の作動であったにもかかわらずである。

以上、ウェントは国家を実在する人格としてみなし、国内社会 / 国際社会の二分法を維持し、主体・構造の問題構成を国家と国際システムに置きなおし、国際政治というディシプリンに構造化論を限定的に適用し、人間不在の物質・観念の二分法を維持

してきた。だが、この類のコンストラクティビズムに対して異議申し立てをしなければ、この議論が結局はこのアプローチの代表例でありつづけるだけになる。それでは異議申し立ての基礎となるオルタナティブのコンストラクティビズムとはいったいどのようなものだろうか。少なくとも、私にとってそれは IR における「権力」概念の意味内容を根本的に読み替えることから始まる。

II. 権力概念の読み替え

1. 他動詞的権力と自動詞的権力

上記でも触れたように、国際システムをホッブズの・ロック的・カント的文化への変遷という形で、国家間の相互作用だけを便宜的に取り上げて国際社会の秩序（世界秩序ではない）が変遷していくということを語ることは、はたして可能なのかという疑問は依然として付きまとう。こうした彼流の世界政体論を支える基礎はウォルツから受け継いでいると思われる権力概念の内容にある。すなわち、ウォルツから引き継いだ権力観によれば、物質的だろうと非物質的だろうと資源 (resources) をある程度操作・動員することが可能な、**権力をもつ**と規定される主体でなければ世界政治の舞台には登場してこない。まして国際政治の舞台にはなおさら登場してこないと考える。⁽⁴⁰⁾これはウェントだけに限ることではないが、ウェント流の国際政治にトピックを限定して議論するコンストラクティビズムがこの点を暗に受け継いでいることをここで明確にすることは重要である。なぜなら、**オルタナティブのコンストラクティビズムを創り出す際に、いわゆる権力を持っていないと想定される諸主体は、実際は権力を作動させており、その点を分析の中核に置くことこそがコンストラクティビズムの再構築の出発点だからである。**この点、マーフィーとトゥーズはペレニス・キャロルを引きながら主流派 IR がこれまで無視してきた様々な権力のリストを暫定的に列挙している。

1) **崩壊を生み出すパワー (Disintegrative power)**…社会組織や経済制度、政治構造を打倒するために、方向性はないが収束していく個人の活動によって、大衆が常に保有している権力、2) **慣性的なパワー (Inertial power)**…組織化や政治的に自覚的な形態をとらないが、上の組織 (topdogs) の意思や計画に従って社会を組織することに全力で立ち向かう抵抗権力、3) **創造的権力 (Innovative power)**[根本的に

新しい社会的な布置を生み出す権力]、**4) 正統化権力** (Legitimizing power) …あらゆる社会を構成する個人や小規模集団の習慣や態度を形成する権力で、その統治権力は彼らの習慣や態度に依拠している。**5) 表出権力** (Expressive power) や **6) 突発的な権力** (Explosive power) …普段は社会のほとんどのメンバーを拘束するような道德規範を超えた行動や要求によって彼らの不満や怒りを表現するための持たざる者たちの権力 (the power of the powerless)、**7) 抵抗の権力** (Power of resistance)、**8) 集合的・協調的権力** [新しい社会的布置を作るための権力]、**9) 移民者や住民のパワー** (Migratory or Population power)⁽⁴¹⁾

上記で列挙した諸権力観は多分に重なり合っているし、定義の厳密性という点からは問題が残るとはいえ、それらから一つの重要な示唆をえることができる。詰まるところ、権力とは単に大国が他者の意思を屈服させたり、他者のある行為を禁止するような「他者に対する権力 (power over others)」だけを意味しているわけではないということである。むしろ逆に、往々にして、「権力は下から来る」し、「権力は、無数の点を出発点として不平等かつ可動的なゲームの中で行使される」。⁽⁴²⁾あるいは権力は言語、観念、制度、具体的物質的現実の諸構造を相互に支える再生産を通した社会生活の瞬間・瞬間で具現化し発動するものである、⁽⁴³⁾とも言うことができる。

整理しよう。権力という概念が多分に多義的・競合的である以上、分類して理解していかざるを得ない。基本的に権力は大きく二種類のカテゴリーに区分される。一つが、「～に対する権力 (power over)」あるいは「他動詞的権力 (transitive power)」。もう一つが、「～をする権力 (power to)」あるいは「自動詞的権力 (intransitive power)」⁽⁴⁴⁾である。前者が他者の意思に対して自らの意思を実現する際に行使する権力、それに対して後者は協力して (in concert) 何かを実現すべく行動するときに現われる権力である。⁽⁴⁵⁾ IR 主流派の権力観は明らかに前者に傾倒している。そしてウェント流のコンストラクティビズムとはいうと、観念次第でこの権力の行使のされ方は変わると考えている。その意味では、ウェントは観念によって前者を後者に転換していけると考える。ここでウェントは、観念が世界に意味を持たせる際には大きな役割を果たすものと考えて一方で、権力は残余 (rump) の物質的なる領域を表現する概念に縮小されている。しかし、注意すべきなのは、彼のいう権力とは依然として物質的権力のままであるということだ。観念こそが権力の操作のカギを握ると考えているとはいえ、その観念イコール権力ではないのである。一見、カント的国際システムをイメージする際のウェントとアーレントの権力観は協調性という観点からすれば似ているように思わ

れるが、前者は「権力の配分 (distribution of power)」というウォルツの用語を継承して、権力の内実とは依然として資源などの計算可能な国力という概念を基礎としているのである。他方で、アーレントの権力観はまったく別の概念を提示する。

例えば、

権力はただ行動するだけでなく一致協力して行動するための人間の能力に対応する。権力は決して個人の所有物 (property) ではない。それは集団に属し、ただ集団が結束し続ける限りにおいてのみ存在する。誰かが権力の座にいるというとき、実際のところかれがある一定数の人からかれらに代わって行為する機能を与えられていることを指しているのである。権力が発現する起源である集団が消えるやいなや、かれの権力もまた消えてなくなる。現在の言葉遣いで、「有力者 (powerful man)」や「有力な人物 (powerful personality)」という場合には、われわれはすでに「権力 (power)」という語を比喩的に用いているのであり、比喩なしに言うとき、それは「力 (strength) となる」⁽⁴⁶⁾

もはや明らかだろう。ウェントにおいては、観念によって権力や利益の内実を転換できると考えているとはいえ、肉体とのアナロジーで登場してくる実在する国家が専らマテリアルな権力を持ち続けているという本質には変わりがないのに対して、アーレントの場合は集団の意志が持続しなければ、そこに権力は存在しないことになるのである。権力とは集合的意志の異名と考える。あるいは人間の身体に宿る他者と共に行動することができるという潜在能力が発動するという事実をもって権力と表現している。

2. 権力とは保有できるものではない

ウェントが依然として国家が保有するものとして権力を考えているのに対して、アーレントは集団の意志を権力と捉える。この相違は権力を保有できるものとするのか否かにかかっている。これまで多くの人々はサイズや能力の大小、つまり保有するリソース⁽⁴⁷⁾の大小をもって権力の大小を語ってきた。しかし、アーレントの指摘するような権力の協働的語りを擁護するならば、リソースと権力は明確に区別されなければならない。我々は「権力の行使」と「その行使を持続させるために動員するリソース能力」を区別する必要がある。⁽⁴⁸⁾ 保有できるものはあくまでリソースであって権力ではない。当然、必要なときに利用することが可能な権力の貯蔵庫も存在しない。⁽⁴⁹⁾ あくまでリソースは権力が行使される際の媒体なのである。⁽⁵⁰⁾ 権力とはある目的に対

して意志が「協働的に・集動的に」立ち現われたときに登場するものである。このようにリソースと権力の区別を通した「権力」概念の読み替えによって、コンストラクティビズムはどのように再構築されるのだろうか。それは観念が権力を操作すると考えるのではなく、権力そのものが集動的意志を体現していると考えerことで IR におけるコンストラクティビズムは、伝統的なパワーポリティックスという文脈から完全に袂を分かつことが可能になることを意味する。

それでは、この協働的権力とはいかなる時に立ち現われるのだろうか？注意しなければならないのは、かつてのように一部の知識人が社会運動に人々を動員すべく企図していくという時代は終わっているということだ。とすれば、無数の単一争点キャンペーンが自発的に登場するのをまたざるをえないのだが、現実には様々な集動的な動員がいたるところで見取れる。例えば、アムネスティーインターナショナルの人権問題への取り組み、ジュビリー 2000 の債務救済運動、グリーンピースや地球の友 (FOE) の環境保護への取り組みなどを考えれば明白であろう。注目すべきなのは、それぞれの運動は単一争点であるにもかかわらず、決して偏狭な一部の利益の追求を志向しているわけではなく、むしろその逆、我々人類が共通に直面している問題に対処するための社会的連帯を目指しているのである。いずれにせよ、こうした諸活動は言説によって問題を特定し、俎上に載せ、様々な人々を經由して作動していく。言説が人間の再帰性を通して権力を作動させる媒体である⁽⁵¹⁾ とすれば、問題はその言説の充填のされ方にかかっている。⁽⁵²⁾

おわりに

ウェントは述べる。「(国家の) アイデンティティ形成は「(国際政治の) 社会理論 (*Social Theory of International Politics*)」では問われていない論点である。国家間システムへの関心を所与として、我々はシステム分析をうまくやるために、主題の性質上やむをえず国家を構成する内的プロセスを括弧にくくり、一時的に国家を具象化しているのだ。」「国家間システムの本に対して、国家を具象化することをやめろ！という要求は、主題を変えろ！という要求とみなされるべきなのだ。」[() 内は著者による追加]⁽⁵³⁾

もはや明らかだろう。ウェントにとって、世界秩序は国際システムと国内システムとの足し算で語られて終了する。しかも彼は国家の内的プロセスや国家のアイデンティティ形成なるものをブラックボックスに入れた。構造は国際システム、主体は肉

体とアナロジー性を持つ人格性を持った国家。権力は依然として観念と分離され、権力概念の根本的な読み替えはせず、観念と権力・利益の二分法を維持する。我々はこうしたアプローチを黙認するわけには行かない。ウェント流のコンストラクティビズムとは対照的に、グローバルに再秩序化された世界における権力の発動は、ウェントが考えているほど単純ではないし、直接的でもない。⁽⁵⁴⁾ リソースとは区別される「権力」の作動そのものが、人々の主体性の構築となっており、かつ主体としての人々が「権力」を作動させているのである。これまでの IR で語られてきた権力政治とはまったく異なる「権力」概念に基づいたコンストラクティビズムの展開の口火は今切られたばかりなのである。

※本稿は、国際基督教大学 21 世紀 COE プログラム「『平和・安全・共生』研究教育の形成と展開」の大学院生のための研究奨励金による成果である。

注

- (1) See Katzenstein, Keohane, and Krasner, pp.645-685.
- (2) 最初にこの言葉を国際関係論において使用したニコラス・オヌフによれば「コンストラクティビズム（構築主義あるいは構成主義）とは、あらゆる社会関係を研究する手法であり、それ自体一つの理論ではない。何を人々が行うのか、なぜ諸社会が異なるのか、どのようにして世界は変化するのかといったことに対しての一般的な説明を提供しない。代わりに、関係てなさそうな事柄 (matters) について理論化することを可能にさせるのである…。…多様な素材の中に価値を見出し、つながりがなさそうなものをつなげる。」としている。Onuf, p.58.
- (3) つまり、国際関係論の議論の中心（ハードコア）に位置するのは国家であるという立場とそれを徹底して批判する立場との応酬はすでに 80 年代に起こっていたという意味で、「またしても」という言葉を使わせてもらった。See Keohane, ed, 1986.
- (4) この点、日本の文脈で言えば、例えば遠藤誠治は「社会構成主義は現実主義や新自由主義的の制度論と同じ意味での理論的潮流ではなく、むしろ方法論に近いものである。したがって、社会構成主義に基づいた現実主義や制度主義を構想することは十分に可能である。例えば、筆者の理解では社会構成主義をいち早く取り入れたウェントの業績は、新現実主義の理論に構成主義の観点か

ら方法論的基礎を与えるものである。」としている。遠藤、94 頁、脚注 15

- (5) コンストラクティビズムのバトルフィールド化は各学問分野の相互侵食と無関係ではない。例えば、政治学においてコスモポリタンデモクラシーの議論はすでに国際関係論にとって不可欠の分野になってきている。また、コンストラクティビズムの理論的基礎を探究しようものなら、たちまちバスター、ギデンズ、ブルデュー、ヴィットゲンシュタイン、バトラーというように社会理論、社会学、言語学などの多岐に及ぶ。むしろ、コンストラクティビズムのトレンドは国際関係論に特有のトレンドというよりも社会学やフェミニズム研究などの他分野で同時進行している構築主義・構成主義の議論の一つの大きな流れの中に国際関係論も位置づけられるべきものであり、今後は他分野で進行中の議論との更なる徹底的な突き合わせが必要になるのではないだろうか。
- (6) 国際関係論のコンストラクティビズムの開始がいつなのかを特定することは難しいとはいえ、冷戦が崩壊した一九八九年に奇しくも二人のコンストラクティビストであるオヌフとクラトチウィル (Friedrich V. Kratochwil) のコンストラクティビズムの著作が世に出てからであるということは可能であろう。そして何よりもそれ以降のコンストラクティビズムの議論は拡大の一途をたどっている。
- (7) コンストラクティビズムが流行りだからという理由で議論とは何の関係もないにもかかわらずとりあえず入れるということではなく、また、ただ単にコンストラクティビズムの議論が活発になってきていることを紹介するだけにとどまるのではなく、掘り下げる作業を通して、どの立場で行くのかの表明をすべきであるという点をここでは意味している。
- (8) ウェントの *Social Theory of International Politics* がどれほど IR というディシプリンに大きなインパクトを与えたかは、例えば、*Review of International Studies* がこの本のためにフォーラムを開き、それに雑誌の多くの紙面を割いていることから明白である。See *Review of International Studies*, Vol.26, 2000. コヘインもまた、ウェントのその著作が今後確実に古典になり、大学院での読書リストに入るとしていることからもうかがい知れるだろう。See Keohane, 2000, p.125.
- (9) Wendt, 1999, p.8.
- (10) *Ibid.*, pp.8-10. なお、ウェントはロバート・コックス (Robert Cox) を引いて「国家と組織化された暴力の分析から得られる知 (knowledge) が、貿易や人権に関心を持つ非国家的アクターにほとんど権能を与えることはないかもしれないことを認める。しかし、そのことは単に国家中心主義的 (state centric) IR を世界政治のより広範な漸進的アジェンダの一要素たりにしていることを意味するに過ぎず、一要素にも決してなりえないわけではない」としている。See p.10. しかしながら、これだけウェントの議論が IR で議論の対象とされ続けていることを鑑みれば、前記のような決して謙虚な位置にウェントの IR は留まるどころか、実質上、国家中心的・コンストラクティビズム IR は主流派 IR の新たな柱の一つとして、その他のアジェンダを周縁化する知の状況を生み出したのではないだろうか。Cf. Kratochwil, 2000. しかもこのケネス・ウォルツ (Kenneth Waltz) 流のシステム論の継承は不可避免的にリチャード・アシュレーによる天球の誤謬 (an orrery of errors) の批判が再びあてはまりうることもここでは確認しておく必要がある。See Ashley, 1984.

- (11) そこから二つの疑問が湧いてくる。一つは、近年の民営化する戦争の問題。すなわち、従来の国家の占有する軍隊という形から軍事業者への商業的業務委託という形へのシフトは、組織化された暴力の独占という前提を切り崩していないのかという疑問である。(この点については、例えば本山、2004年を参照。) 傭兵という形は昔にもあり、新しい現象ではないというスタンスを取ろうと、新自由主義的経済システムの軍事面への波及として新しい事象と位置づけようと、このトピックはウェントの議論とは別のルートで世界政治あるいは世界秩序の議論につながっている。とすれば、ウェントの議論したい安全保障でさえ政治経済学的アプローチを経由して、かなり異なった結論に辿り着く可能性があるということ、ここでは問題提起しておきたい。もう一つは、一つめとは別の意味での暴力の独占の意味を歴史的に掘り下げる作業の不十分さについてである。アンソニー・ギデنزは、国民国家とは国内の基本的な人権の保障・充実や経済発展を、対外的な組織化された暴力の独占による総力戦体制への備えとして発展してきたパワーコンテナンとして捉えた上で、今日そのシステムに挑戦する地球的問題群までを射程に入れて、内外の政治経済上の有機的連関性について注意を払ってきた(See Giddens, 1985)。しかし、ウェントのそれは内外の連関性のダイナミズムという視点を著しく後退させ、国家のアイデンティティと利益を決定する国内政治と国家間システム固有の領域に切り分けて議論を立てる。この点に関しては、ウェントは内外の区別を設けて、対外的には国家を実在のアクターとして論じたが、それはスーザン・ストレンジ(Susan Strange)が構造的権力として安全保障構造、生産構造、金融構造、知識構造を一次的構造として併置して国際関係を読み解いたのとは対照的である。See Strange, 1994.
- (12) Wendt, 1999, p.10.
- (13) *Ibid.*, p.244.
- (14) 例えば、Wendt, 2004.
- (15) Wendt, 1999, p.202.
- (16) *Ibid.*, p.211.
- (17) *Ibid.*, p.198.
- (18) *Ibid.*, p.143. ただし、別のところで、彼はギデنزよりもバスターにより重きを置くことも言及してはいる。してはいるが、彼のいうマクロ理論は依然としてギデنزの構造化論に多くを負っていることに変わりはない。See Wendt, 1987, p.357, footnote 57.
- (19) Giddens, 1979, p.7.
- (20) Wendt, 2003, pp.516-528. ちなみに、彼はこの5段階が単線的に進むものではなく、後退もするが、二歩前進することでバランスが図られるとしている。See p.517. しかし、こういったことで図式的な段階的進化論の類と本質的な違いが生まれるというのだろうか？
- (21) Giddens, 1979, p.55. 「行為とは世界内事象の持続的過程の中での身体的存在(corporeal beings)の能動的あるいは熟慮された因果的な介入の動き」としている。しかし、この身体的存在を国家に限定して、IRに構造化論を適用してしまうと、当初のギデنزの狙いは失われてしまうことになる。

- (22) Thrift, p.31. See also Wendt, 1987, p.356.
- (23) ウェントは自らの立場が1987年当初よりも、合理主義と構築主義を対抗的に見なくなったと述べているが(See Wendt, 2000, p.179)、私にしてみれば、ウェントはギデنز構造化論がそもそも空間論の批判的再構築を狙いとしていたことを、まったく真剣に取り扱わず、骨抜きにし、使えそうな部分だけを利用したに過ぎなかったといわざるをえない。
- (24) Doty, p.137.
- (25) いうまでもないが第一イメージは人間の善悪などの本性に関する領域の議論、第二イメージは国内システムに関する領域、第三イメージは国家が形成する国際領域である。Cf. Waltz.
- (26) *Ibid.*, p.201.
- (27) 結局、ウェントは国境を所与として論を立てていく IR 主流派とほとんど違いがないという意味で、「領域性のわな (the territorial trap)」にはまったままなのだ。See Agnew.
- (28) これはギデنزの伝統的な社会学の一国的な「社会」観への批判、ならびに「国家横断的な社会」(a transnational society, a transversal society) あるいは「世界社会」(a world society) への議論の展開の必要性の主張と共鳴しており、そのことはマーティン・ショー (Martin Shaw) によって IR においても同様の意義を継承している。See Shaw. 最近では Ulrich Beck の諸論稿を参照されたい。See Beck, 2003, 2004.
- (29) 一点確認しておきたい。何も国内社会と国際社会の二分法を採用する論者はウェントに限らないから、ウェントだけをこの点で批判することはアンフェアだという批判が来るかもしれない。しかし、Constructivism とはまさに社会なるものの概念をどのように組み立てるのか、用語の選択から理論展開にいたるまで、論者の紡ぎだす言説そのものが、社会なるものの内実を作り出すことになる。従って、この二分法ロジックに専ら寄与しているのか、それとも社会の前につく形容詞は様々に存在すると考えるのか、という観点からウェント自身のスタンスを検証する必要があったからだ。ちなみに、国内/国際の二分法批判はすでに Walker でかなり踏み込んでなされているのだが、ウェントにあっては別のトピックになってしまうため、ほとんど議論には登場してこない。
- (30) Wendt, 1999, p.210.
- (31) 確認しておこう。ウェントは自らの国家—国内社会複合体という理解を裏づけするものとしてコックスの国内体制の違いと世界秩序との関係性についての議論を利用しているが、コックスの真骨頂であったはずの市場の国際化、国家の国際化という議論は引き合いには出さないのである。またしてもウェントは国内社会の体制の違いには配慮することで、世界秩序論に一見注意を払っているように見えて、実際は諸社会が一つのものに溶け込んでいくという側面は意図的に排除しているのである。
- (32) ここで想定できる批判に回答しておこう。ウェントは国際政治の社会理論を論じたのであって、国際政治経済学 (IPE) の社会理論をしたわけではないので、扱う事象が異なるのだから上記の国内/国際の二分法をとることは許されるというものだ。しかしながら、彼は IPE の議論を持ち

込んで彼の議論を仕上げているからこそ、論争点になるのだ。よって、上記の批判は、国際政治を語るのに、Cox を使うなという批判をウェントに投げているのと同じ結果になってしまうのである。

- (33) Wendt, 1999, p.20 and Chap.3.
- (34) *Ibid.*, p.135.
- (35) *Ibid.*, p.136.
- (36) Cf. *Ibid.*, p.137, p.184.
- (37) *Ibid.*, p.96.
- (38) ギデنز構造化論にとって鍵概念でもある「実践」という言葉は実はウェントの別の論文の中で言及されている。ここで彼が暗黙に想定しているアクターは国家であるとはいえ、社会構造は、共有知識と物質的資源、実践からなっているとす。そして「社会構造はアクターの頭の中や物質的な能力の中にあるものではなく、実践のなかにある。社会構造はただプロセスの中のみ存在する。」Wendt, 1995, p.74. ところが、「国際政治の社会理論」では実践という概念を掘り下げず、奇妙なことにほとんど登場してこない。
- (39) *Ibid.*, p.129.
- (40) Tooze and Murphy, p.687.
- (41) *Ibid.*, p.699 Originally, Carroll, 1972.
- (42) ミッセル・フーコー、121 頁。
- (43) Tooze and Murphy, p.703.
- (44) Goehler, p.42. Pitkin, 1972, pp.276-7. なお、ここでは前者の代表者をウェーバー、後者をアーレントとしている。
- (45) しばしば、この後者の協調的権力観はいったん社会関係の文脈に落とせば、常にそれ以外の他者を抑圧する可能性があるとして批判されることがある。しかし、実際はアーレントのいう権力は「共同的なコミュニケーション」を通じて顕在化するものであり、この自動詞的権力も他動詞的権力同様、社会関係の中で他者と共に連携してはじめて作用するものであり上記の批判はその事例ごとの当てはめの中でこそ検証される必要があろう。*Ibid.*, p.43.
- (46) Arendt, p.44. (翻訳 133 頁参照)
- (47) 訳語に関して、資源というと日本語では物質的な素材のみを意味することが多いため、情報や組織をも含めた権威的要素も射程に入れるためあえてカタカナ表記とした。
- (48) Allen, p.5.
- (49) *Ibid.*, p.39.
- (50) Giddens, 1979, p.91.
- (51) Goverde et al., p.14.
- (52) 野崎、5 頁。なお、言説の議論の展開は本稿の範囲を越えており、別稿に譲らざるをえない。
- (53) Wendt, 2000, p.175.

- (54) 世界政治に対するスケールの多層性についての考察に関しても、本稿の範囲を超えており別の機会に取り組みねばならないが、さしあたり以下のものを参照のこと。Brenner et al.

参考文献

- Agnew, John, "The territorial trap: the geographical assumption of international relations theory," *Review of International Political Economy*, Vol.1, No.1, 53-80, 1994.
- Allen, John, *Lost Geographies of Power*, Malden, Mass. : Blackwell, 2003.
- Arendt, Hannah, *On Violence*, San Diego: Harvest, 1970 (山田正行訳 『暴力について—共和国の危機—』みず書房、2000年).
- Ashley, Richard K., "The poverty of neorealism," *International Organization*, Vol.38, Issue 2, 225-286, 1984.
- Beck, Ulrich, "Toward a New Critical Theory with a Cosmopolitan Intent," *Constellations*, Vol.10, No.4, 453-468, 2003.
- , "Cosmopolitical Realism: On the Distinction between Cosmopolitanism in Philosophy and the Social Sciences," *Global Networks: A Journal of Transnational Affairs*, Vol.4, No. 2, 2004, 131-156
- Brenner, Neil, Bob Jessop, Martin Jones, and Gordon Macleod, *State/Space: A Reader*, Oxford:Blackwell Publisher, 2002.
- Carroll, Berenice, "Peace Research: Cult of Power," *Journal of Conflict Resolution*, Vol.16, Issue 4, 585-616, 1972.
- Doty, Roxanne Lynn, "Desire all the way down," *Review of International Studies*, Vol.26, 137-139, 2000.
- 遠藤誠治「第2章 国際政治における規範の機能と構造変動—自由主義の隘路—」藤原帰一・李 鍾元・古城佳子・石田 淳編所収『国際政治講座4 国際秩序の変動』東京大学出版会、2004年。
- ミシェル・フーコー『性の歴史I 知への意志』(渡辺守章 訳)、新潮社、1986年。
- Giddens, Anthony, *Central Problems in Social Theory*, Berkeley: University of California Press, 1979.
- , *The Nation-State and Violence*, Cambridge: Polity Press, 1985.
- Goehler, Gerhard, "Constitution and Use of Power," in Henri Goverde, Philip G.Cerny, Mark Haugaard, Howard H. Lentner, eds, *Power in Contemporary Politics: theories, practices, globalizations*, London; Thousand Oaks, CA : Sage, 2000.
- Goverde, Henri, Philip G.Cerny, Mark Haugaard, and Howard H. Lentner, "General Introduction: Power in Contemporary Politics," *Power in Contemporary Politics: theories, practices, globalizations*, London; Thousand Oaks, CA : Sage, 2000.
- Hassner, Pierre, "Obstinate and Obsolete: Non-Territorial Transnational Forces versus the European Territorial State," in Ole Tunander, Pavel Baev, and Victoria Ingrid Einagel, eds., *Geopolitics in Post-Wall Europe: Security, Territory and Identity*, London: Sage Publications, 1997.

- Katzenstein, Peter J., Robert O. Keohane, and Stephen D. Krasner, "International Organization and study of world politics," *International Organization*, Vol.52, Issue 4, 645-685, 1998.
- Keohane, Robert O., ed., *Neorealism and its Critics*, New York: Columbia University Press, 1986.
- , "Ideas part-way down," *Review of International Studies*, Vol.26, 125-130, 2000.
- Kratochwil, Friedrich V., *Rules, norms, and decisions on the conditions of practical and legal reasoning in international relations and domestic affairs*, Cambridge; New York: Cambridge University Press, 1989.
- , "Constructing a New Orthodoxy? Wendt's 'Social Theory of International Politics' and the Constructivist Challenge," *Millennium: Journal of International Studies*, Vol.29, Issue 1, 73-101, 2000.
- 南山淳「コンストラクティヴィズムと権力 / 知 —アレキサンダー・ウェントを中心に—」『筑波法政』三十四号、127-141 頁、2003 年。
- 本山美彦『民営化する戦争』、ナカニシヤ出版、2004 年。
- 野崎孝弘「国際関係論におけるヘゲモニー概念の批判的検討 (3) —本質主義、モダニティ、全体性への意志—」『早稲田政治公法研究』67 号、2001 年、1-29 頁。
- Onuf, Nicholas, *World of Our Making : Rules and Rule in Social Theory and International Relations*, Columbia, S.C. : University of South Carolina Press, 1989.
- , "Constructivism: A User's Manual," *International Relations in a Constructed World*, in Vendulka Kubalkova, Nicholas Greenwood Onuf, and Paul Kowert, eds, Armonk, N.Y. : M.E. Sharpe, 1998.
- Pitkins, Hanna F., *Wittgenstein and Justice*, Berkeley, CA: University of California Press, 1972.
- Review of International Studies, "Forum on Social Theory of International Politics," *Review of International Studies*, Vol.26, 123-124, 2000.
- Shaw, Martin, *Global society and international relations: sociological concepts and political perspective*, Cambridge, UK: Polity Press, 1994.
- Strange, Susan, *States and Markets*, 2nd edition, London; New York: Pinter Publisher, 1994.
- Thrift, Nigel, "On the determination of Social Action in Space and Time," *Environment & Planning D*, Vol.1, 23-57, 1983.
- Tooze, Roger, and Craig N. Murphy, "The Epistemology of Poverty and the Poverty of Epistemology in IPE: Mystery, Blindness, and Invisibility," *Millennium: Journal of International Studies*, Vol.25, Issue 3, 681-707, 1996.
- Walker, R.B.J., *Inside/Outside: International Relations as Political Theory*, Cambridge: Cambridge University Press, 1993.
- Waltz, Kenneth N., *Man, the State, and War: A Theoretical Analysis*, New York: Columbia University Press, 1959.
- Wendt, Alexander, "The agent-structure problem in international relations theory," *International Organization*, Vol.41, Issue 3, 335-370, 1987.
- , "Constructing International Politics," *International Security*, Vol.20, No.1, 71-81, 1995.
- , *Social Theory of International Politics*, Cambridge: Cambridge University Press, 1999.

- _____, "On the Via Media: a response to the critics," *Review of International Studies*, Vol.26, 165-180, 2000.
- _____, "Why a World State is Inevitable," *European Journal of International Relations*, Vol.9, Issue 4, 491-542, 2003.
- _____, "State as person in international theory," *Review of International Studies*, Vol.30, Issue 2, 289-316, 2004.

For Reconstructing of Constructivism in International Relations - A Focus on Critical Examination of Alexander Wendt -

<Summary>

Yukio Maeda

This paper consists of two chapters. The first one is about “Constructivism of Alexander Wendt and the problems.” The second is “mutating the content of the concept of power.” I raise four points at stake which be taken up for discussion in his arguments in particular and examine them one by one. The first point is about “the actually existed state thesis.” In here, I question the propriety of the supposition of a state with personality acting in one's own right. The second point is about the social theory by Wendt. Although he constructed his own theory partly due to the structuration theory by Anthony Giddens, I question on the consistency with the structuration theory. In particular, I question his way of applying the problematique of agent-structure relations in Social Theory to that of the state and the International System. I also doubt his omission of spatiality problematique from his book. The third point is about the adequacy of his usage of the words “system and society.” I question his dichotomization of international and domestic systems. For Wendt, all the spheres that are not international are categorized as domestic. In addition, Wendt regards society to be a domestic society when he refers to a society, and does not even specify it as a national society. Indeed, in light of such dichotomy between an International System and a Domestic System, he mentions “a state - society complex” to establish the link. I would also investigate the propriety of his framework. Last but not least, I would examine his dichotomy between the ideal and the material. He does not tackle “the power” as a general concept which has been one of the central problems in International Relations but rather evade answering it by stating that “ideas” predominantly constitute power and national interests. I doubt his formula of separating ideas and power or the ideal and the material.

In the latter half of the paper, by setting one chapter of mutating the meaning of power, I focus on “power” as the key concept to develop an alternative form of constructivism different from that of Wendt. At first I make a distinction between transitive power and intransitive power to clear ambiguity of power as a concept. Wendt assumes that how power is exercised depends on how the idea is exercised. Although he thinks it is possible to realize the right guidance of power by the idea, his conception of power is still materialistic. While he thinks it is operation of the idea as one side of a pair concept that leads power to a righteous way, the idea is not the same as power for him, even not synonym. I clarify this problem by comparing Wendt’s tacit usage of Power with the power concept of Hanna Arendt to show differences between what the power can be held and cannot be held. The latter divides a resource clearly from power. In light of the latter, in contrast with constructivism of Wendt style, power operation in the re-ordered global world is less simple, and cannot be operated directly. Finally I claim that from now on, IR should be thoroughly narrated and dealt with again from the point of view that power cannot be held but operated and run around.